

# からくりになつた『船弁慶』

～竹田からくり「傀儡師」の世界～

同志社大学文学部教授 山田 和人

『船弁慶』は後世に引き継がれた名作のひとつである。歌舞伎でいえば、長唄『船弁慶』、人形浄瑠璃・歌舞伎『義経千本桜』の渡海屋等で知られている。古典を典故とする演目の中でも、本文の大半を襲用する能の作品の代表格と言えよう。前半は、義経と静の愛別離苦の哀れが美しい舞を頂点に表現される。後半は、西海に沈んだ平家一門の知盛が、乗船する義経主従の行く手の海上に現れるが、弁慶に祈り伏せられて白波のうちに消えていく。この前半と後半の対照のおもしろさが演目としての魅力でもある。原作がきわめて劇的に作られているために、さまざまなジャンルに引き継がれる場合も、原作を活かして脚色がなされることが多い。

いわゆる名文句として引き継がれていくのは、後半の知盛と義経主従の緊迫した掛け合いと立ち回りの迫力のある場面がほとんどである。長唄の場合も、人形浄瑠璃・歌舞伎の場合も、歴史のなかで翻弄された平知盛の悲憤に焦点を当てたある種の怨霊劇として、引き継がれていった。

人口に膾炙した『船弁慶』が意外なところにも継承されている。今回紹介するのは、からくり人形に引き継がれた「船弁慶」である。具体的にはかつて大坂道頓堀で興行されていた竹田からくりで上演された「傀儡師」である。竹田からくりの演目の中でも、「傀儡師」は最多の上演回数を有する演目で

あり、一日の興行の最後を飾る大からくりとして知られていた。傀儡師は、首から箱を提げて箱の上で人形を操って見せる大道芸であつた。江戸市中では、正月に訪れてくる新春を告げるまればとであつた。頭には頭巾を被り、首から箱を提げて、家々を訪ねる門付け芸であり、町の辻々で演じられる大道芸であつた。それをからくり化したのが、竹田からくり「傀儡師」である。

からくりは、現在も愛知県半田市亀崎潮干祭で奉納上演されている。田中組神楽車の上山人形として、毎年五月三日、四日の両日、海浜公園と尾張三社、県社で上演され、多くの見物客を集めている。両日、海浜に山車を曳き下ろすのが見せ場であり、その後、人形が奉納される。亀崎には、東組宮本車、石橋組青龍車、中桐組力神車、田中組神楽車、西組花王車と、各組に山車とからくりが伝承されている。からくりは、山車の正面前部の前棚に備え付けられる小ぶりの前からくりと、山車の二階に飾られる大ぶりの上山からくりがある。

「傀儡師」は、上山からくりとして田中組の神楽車に伝承されてきた。実は、これは、現存する唯一の竹田からくりの検証可能な事例であり、奇蹟的に祭礼と結びつくことで伝承されてきた。竹田からくりの絵画資料と現存からくりを詳細に比較検討してみると、人形の動態がほぼ一致しており、かつての竹田からくりの演技・演出をとどめている生きた演劇資料

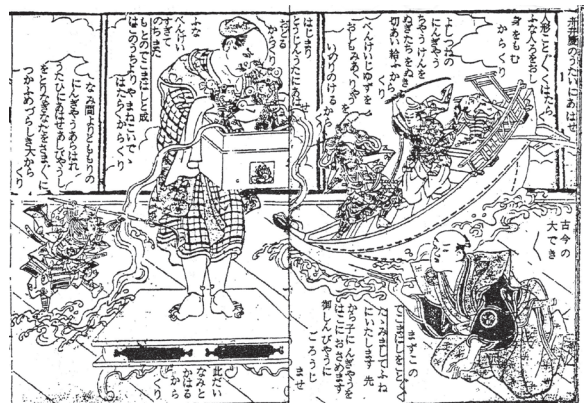
であることがわかる(拙稿「竹田からくり」傀儡師)について」  
『歌舞伎研究と批評』十二号一九九三年)。

「傀儡師」の演技は三段構成になっている。最初は、傀儡師が唄にあわせて首から提げた箱で唐子人形を遣い、その後、傀儡師の上半身が箱の中に畳み込まれて、船弁慶の舞台に転換する。箱から舟が現われて、船には義経、弁慶、舟子が乗船している。もう一台のからくり台にセットされた知盛の幽霊がせり上がって、海上で義経主従と戦い、やがて弁慶に押し伏せられ、海中へと姿を消す。本文は謡曲とまったく同文である。船弁慶の場面が終わりに、傀儡師が元の姿にもどり、箱から山猫が現われ、囃子言葉とともに山猫が前方に飛び出していく。

### 『機関竹の林』「傀儡師當船弁慶」

(国立国会図書館)がもつとも詳細な情報を伝えている絵画資料である。図版の中から整理すると、まず、口上人の最初のからくりについての概略の説明がある。次に傀儡師のからくり人形が首から提げている箱で唐子踊りが演じられ、その後唐子人形が箱のなかに納まり、やがて、傀儡師の人形が畳み込まれ、次に舟弁慶の場面になる。唐子の踊りは唐人歌あるいは歌三味線等とあり、歌を伴っている。そして、おそらく、傀儡師が舟に変わる間に傀儡師人形の置かれている台座が波に変わる。

ここから「船弁慶」の場面となって、謡に合わせて、それぞれの人形がごとごとく働く。舟人は櫓を漕ぎ続ける。やがて、



のなかから山猫が出て、さまざまに働く。『竹田新からくり』によれば、山猫が飛び出す仕掛けになっていたことがわかる。

この図版を見ると、すべてが傀儡師の箱の中から現れるというのが、このからくりの一番の見せ場であり、『船弁慶』がいわば劇中劇として挿入されている。実際には、せり上げ・せり下げの仕掛けを使って知盛の出現を演出し、知盛の荒ぶる様子を竹田風車(薙刀を持つ手が高速回転する)で表現し、知盛と対決する弁慶が数珠を押し揉む所作も激しく演じられる。からくりならではの楽しい「船弁慶」の世界である。

波間から平知盛の怨霊が現われ、足拍子を取り、さまざまに薙刀を使い、義経一行に怨みをなす。義経は長絹を脱ぎ、太刀を抜いて知盛に立ち向かう。弁慶は数珠を押し揉んで知盛の怨霊を押し伏せる。

そして、知盛が波間に消えると、舟弁慶の場面は終わり、またもとの傀儡師人形に戻る。その後、箱